

美術館館長とのつれづれなる談義【2017 年秋】

先日、大阪府枚方市にある公益財団法人天門美術館の

2017 年度秋季特別展

自娛の風懷 ～幕末明治の文人書畫～ 展

(平成 28 年 10 月 8 日から 11 月 5 日まで開催、月曜日は休館)へ行ってきました。

鑑賞していて一番魅かれたのは、勝海舟の書いた『讚美歌書』でした。

独特の書体が筆者の意思の強さを感じさせます。

幕末から明治にかけて志のある人物が大勢現れました。志のある人物は教養があります。

教養人が時に政治に係わったり、時に書画をかく。そんな時代でした。

現在は、当時に比べ科学技術は大いに発達しましたが、教養の面においてはいかなもの
でしょうか。狭く、浅くなってしまった気がしてなりません。



館長は、近頃、中学校の同窓会を開くべく、幹事
代表として奔走されたそうです。

一学年 400 余名中 100 名を超える参加予定者。
場所の選定、連絡・勧誘、料理の決定、人数の
確定等、1 年をかけて準備する中で、

”同等なはずの人間関係の上に生じる上下関係”
をはからずも感じたそうです。

この同等意識は「子どもの頃に勉強ができようが、今出世してようが、そんなの関係ねえ。」と
いう感覚です。よくわかります。“裸のつきあい”をしていたわけですから。

館長のいう「上下関係」は、女子についてでした。しかも本人に関わりがないところで。

つまり、配偶者(夫)の上下関係が妻の人間関係に影響を及ぼしているのです。

世間は狭い？世間は非情？世間は複雑？

山中信天翁の図録は、解説を依頼したものの原稿の進みが悪く、しばらく時間がかかるとの
ことでした。